

野菜の輸入量と国産野菜の卸売価格との関係

品目	輸入量と卸売価格の関係	国内の事情	国内の主な産地とその供給期間	輸入元の供給体制等	主な輸入元とその供給期間
<p>たまねぎ</p>	<p>たまねぎの輸入数量と卸売価格の推移</p> <p>・月別（当月）の輸入数量と国内卸売価格は、各年の6月を除いてほぼ平行の動きを示している。</p> <p>資料：農林水産省「植物防疫統計」、東京都中央卸売市場「市場統計情報」以下同じ</p>	<p>・国内産のシェア5割強を占めるホクレンは、実需者への供給量を前年10月頃に収穫量を勘案し決定。不作であった昨年は、その時点で実需要望が満たせないことが判明し不足分が輸入へシフトした。</p> <p>・国産新玉は水分含量が多く加工歩留まりが低いため輸入品が好まれる。このため新玉の出回る時期の6月に輸入が伸びる傾向がある。</p>	<p>北海道（8～4月） 佐賀（4～8月） 兵庫（5～8月）</p>	<p>・中国の収穫量2,165万トン、うち日本の輸入量は16万トン</p> <p>・契約形態は、周年又は産地の出荷期間に合わせた期間契約が主体</p> <p>・産地の貯蔵施設（冷蔵）に貯蔵されたのち冷蔵コンテナにより搬出される計画的な輸出を実施</p> <p>・青島港から本邦到着まで2日程度</p>	<p>江蘇省（4～6月） 山東省（4～6月原 体、7～11月貯蔵） 雲南省（1～4月） 甘粛省（9～2月）</p>
<p>にんじん</p>	<p>にんじんの輸入数量と卸売価格の推移</p> <p>・月別の輸入数量と国内卸売価格は、ほぼ平行だが、価格の下降期に輸入量が増加する場合がある。</p>	<p>・国内の主産地が千葉、徳島、青森、北海道と巡り、それぞれ代替産地がないため、特定産地の作柄により思惑買いのスポット輸入が発生する。</p>	<p>千葉（11～3月） 徳島（3～5月） 千葉（5～7月） 青森（"） 北海道（8～11月）</p>	<p>・中国の収穫量929万トン、うち日本の輸入量は2.6万トン</p> <p>・周年又は産地の出荷期間に合わせた期間契約が主体だが、日本の国内産地の作柄に応じてスポット契約も発生</p> <p>・スポット輸入は少なくとも2週間以上必要。結果として国内価格が下がってから現品が到着することも起こる。</p>	<p>山東省 （5,6,10,11月） 福建省（1～5月） 台湾（3～5月） NZ（4～8月）</p>
<p>ねぎ</p>	<p>ねぎの輸入数量と卸売価格の推移</p> <p>・卸売価格の動向に係わらず輸入数量はほぼ一定。</p>	<p>・中国産を使うユーザーと使わないユーザーが明確に色分けされている。</p> <p>・中国産の主たるユーザーは外食の中華チェーン、そばチェーンなどであり固定需要が確立されている。</p> <p>・一方、国産品のみを利用するユーザーは、国内の産地が複数あるため国産の代替が容易に行える。</p>	<p>千葉、埼玉 （12～5月） 茨城、関東 （5～8月） 青森（9～11月）</p>	<p>・中国産の輸入量は3.3万トン（国内流通している品種は日本の長ねぎとは異なる。）</p> <p>・もともと長ねぎは、たまねぎ、にんじんとは異なり、中国国内需要が無く、日本の業者が日本への輸出を目的に持ち込んだもの。</p> <p>・産地の出荷時期に合わせた期間契約が主体</p>	<p>山東省（7～11月） 福建省（12～6月）</p>